# 轟音

**［爆裂の波動］**

**「大事ばい」。ただの非常ではないことは、だれの耳にも明らかだった。大正3年12月15日、午前9時40分。筑豊炭田、三菱方城炭鉱での大爆発。大地を裂くようにとどろいた音が、この町と人と心を大きくゆるがした。中空で渦巻く黒煙に、人々はおののいた。その時、何が起こったのか。炭鉱で活気づく町を涙と悲痛に一変させた日本最大の事故と向き合う。**

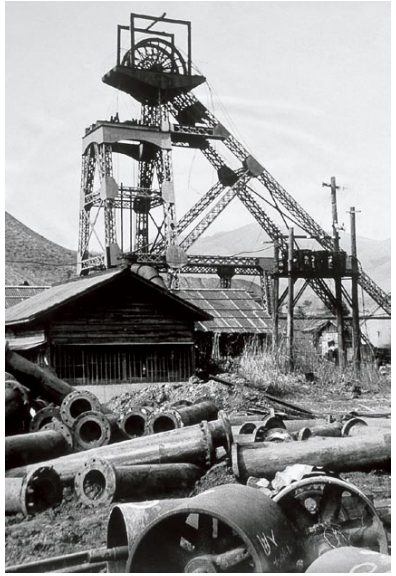
## 東洋一の竪坑

### 筑豊炭田屈指の新式大炭鉱

のどかな農村に現れた巨大な鉄塔。高さ21㍍、見上げるほどの櫓が川筋を見渡すようにそびえました。

筑豊炭田に進出した三菱合資会社は、明治29年からの炭層調査を経て明治35年に方城で竪坑の建設に着手します。それまでは、ほとんどの炭鉱が坑夫（坑内作業員）の昇降を斜めに行う斜坑でしたが、三菱方城炭鉱は深部の良質な炭層を採掘するため、新式の竪坑方式（直下型）を採用しました。深さ270㍍、当時、東洋一の深度を誇りました。明治41年に第二坑、その2年後に第一坑が完成し、筑豊炭田のトップを切った大型竪坑がこの地に立ったのです。

福智山を背景に、誇らしく立ち並んだ両竪坑と赤レンガの煙突は、たちまち「炭都・筑豊」の象徴として、もてはやされました。方城炭鉱は、明治41年に12万㌧、5年後の大正2年には26万㌧を出炭し、めざましい躍進をとげます。方城村も農村から炭都の一角として様相を変え、炭鉱景気にわきかえりました。



三井田川、日鉄二瀬とともに明治期の「日本三大竪坑」とされた三菱方城。当初その規模は鉱業界を驚かせた。明治45年に発電所を開設し、出炭量をさらに伸ばした。

## 真っ黒なキノコ雲

### 雷が地底をはうような衝撃

方城炭鉱が開鉱してから6年が過ぎた大正3年、第一次世界大戦が勃発し、日本が8月に参戦します。その主要なエネルギーを産出する筑豊も、あわただしく年末をむかえようとしていました。12月15日、みずゆき（みぞれ）が降ること以外は、いつもとかわらない朝でした。

方城炭鉱近くの伊方尋常小学校では2時間目の授業をむかえ、子どもたちが教科書を開いてまもないころ。時計の針は9時40分を指そうとしていました。

「ドドーン」。

大地が裂けたようなすさまじい音。窓ガラスが破れ、チョークが跳ね上がり、教室は悲鳴につつまれました。窓の外に見えるはずの櫓が、吹き上がった黒煙に覆われ、地底からの煙は渦を巻きながらしだいにキノコ状の雲となって上空に広がっていく…。まもなく、あたりから「非常や、非常」と叫ぶ声が響き渡りました。

当時の証言や新聞記事では「雷が地をはうようにして、一気に吹き上げた」「巨砲10数門を一度に発射したようだ」「8㎞四方まで響いた」と、すさまじい爆発音が伝えられています。

坑内爆発（炭じん爆発）によって巻き上がった噴煙。方城炭鉱の爆発事故は、この写真をはるかに上回る規模だったと想定される。写真／田川市石炭歴史博物館

周囲が吹き飛んだ爆発後の坑口に坑夫の家族が悲痛な面持ちで押し寄せた。この衝撃で彦山川の対岸にあった三菱金田炭鉱で落盤が発生、1人が死亡、1人が重傷を負った。写真／福岡日日新聞（西日本新聞社の前身）

## 坑底から響いた「うごめく声」。少年は全身を打ちのめされた気がして、思わず後ずさりした。

その猛烈な威力は「坑口から10㍍ほど離れた塌風機室が壊れ、四散したレンガの破片が60㍍先の事務所のガラス戸を打ちやぶって飛び込んだ」「昇降機が櫓の上まで噴きあげられた」「地上では坑口から約2百㍍以内の人が歩いていて倒れるほどだった」などと記されています。

明治33年生まれの手島直信さん（弁城・平成3年没）は当時伊方尋常高等小の高等科1年生（現在の中1）。学校から事故現場まで走り、ロープ越しに坑口から底をのぞきました。

「悲鳴とも、叫びともいえんげな切ない声が、つぼした（坑底）から聞こえてきよった」と、のちに語っています。

うなり声やしぼり出すような声が入り交じった息もたえだえな叫び…。

直径約5㍍の坑口から響いてくる声に「全身を打ちのめされた気がした」といいます。彼はその場にいたたまれなくなり、思わず後ずさりしました。

「大事ばい」。激しくなる身震いは、当分おさまりそうにありませんでした。

**インタビュー**

地底の声を聞いた手島直信さんの子

**手島 直倫**さん（弁城 新町）

坑口から何とも表現しがたい、うめき声のような声が聞こえたと父は語っていました。わたしも三井三池の炭鉱爆発で友人を失いましたが、その悲惨さや遺族の心痛は相当なものでした。さらに大規模な方城大非常は、我々では想像もつかない惨状だったと思います。

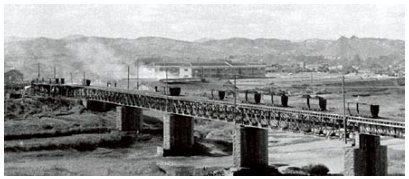
### パニック状態の「直方七番」

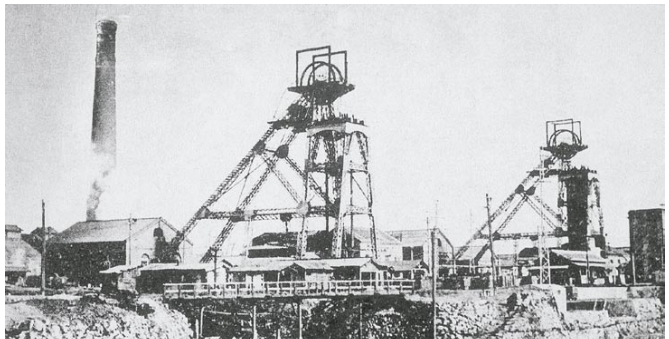
## ロープをすぐに

爆風で飛んだレンガでガラスが割れた事務所の電話「直方七番」は、事故発生以来、休まるヒマがありませんでした。事故当日を含む3日間で1千400通の電報が行き来し、金田駅の鉄道の乗降客は4千402人を数えます。現場では悲報でかけつけた坑夫の家族を整理するため、正門から下風坑の坑口に向かってロープが2本、2㍍幅に張られていました。金田商店街の三村本店は「非常や非常、ロープをすぐに」と、しぼり出すような悲痛な声で連絡を受けています。店主と従業員数人がすぐさまロープを手に駆けつけ、その後、現場では炊き出しを行ったといいます。

方城炭鉱からの連絡の話を祖母から聞いた三村貴作さん（金田新町）

↓明治41年の竪坑完成時のもち投げ、炭層調査から12年もの年月をかけた。【写真右】明治37年には早くも金田駅へと石炭輸送用の鉄道引込線が敷かれ、彦山川に鉄橋が架かった。奥に見える建物は金田小学校。三菱は明治43年に金田鉱も買収した。





→明治期の採炭現場では、手堀りの採掘が行われた（田川市石炭歴史博物館）【写真下】三菱方城炭鉱の象徴となった両竪坑と赤レンガの煙突。